

特集

21世紀の ミュージアム 大学美術館

大学美術館は一九九九年一〇月の開館以来、
さまざまの展覧会をとおして多くの観客に親しまれてきた。
教育と表現の場である芸大のなかの美術館が果たしていくべき
役割について提言を外部専門家をお願いした。
あわせて過去三年間の歩みをたどり、
所蔵のコレクションから名品一〇選を紹介する。

大学美術館への提言

国立の芸術大学に付属する美術館という特性から
大学美術館に寄せる期待は非常に大きい。
美術界の動向、美術館行政に詳しい二人の識者に提言をお願いした。
そのご意見を受けて、大学美術館館長がこれまでの歩みをたどる。

大学美術館と奏楽堂の役割

辻井喬

明治以来のことだからわが国の近代芸術もすでに長い歴史を持っており、その間の有形、無形の蓄積の非常に大きな部分は芸大に集まっていると思われる。

その芸大に美術館と奏楽堂が作られ、多くの人がわが国の近代芸術の歴史に触れやすくなったことはとてもいいことだと思つ。

かつて西欧の美術館の多くは、あたかもその国の威信を示すかのように、版図の拡大と共に手に入れることができた古代の遺跡や芸術的遺品を現地から引き剥がして一堂に並べるのを性格としたのであつた。それは国公立の美術館ばかりでなく、個人の資産家の資産蒐集を基盤とする美術館、博物館も同じ性格を持っていた。それでも人々の役に立つような形で公開しただけ有益であり、参観する人たちは蒐集が行われた過程に帝国主義や植民主義の影を感じながらも、「実物」に触れることで、あたかも美の本質を盗み見るような感じで觀賞し、そこから多くの芸術的感化を受けて来たのであつた。しかし、芸大美術館の場合は基本的な性格が違つように私は思つ。

周知のようにわが国はあらゆる芸術分野で中国大陸や朝鮮半島、そして南方のアジア諸国から伝えられた芸術を、春夏秋冬の変化の極立っているわが国の気候風土、そこに住む人々の美意識と感性、思想で蒸溜して、独特の芸術を作ってきた。舞台芸術でも文学でもそれは同じことであつた。

そこへ、科学理論、工業技術の面で進んだ欧米の文明が一度に入つて来た時、それまでの反動として伝統芸術の様式全体を否定する動きが起つた。この動きは明治維新の際と、一九四五年神国日本が連合軍に無条件降伏をした時の二度にわたつて発生した。

昭和二十年の敗戦の際は、それまで軍閥官閥が皇国史観をふりかざして本来の伝統を歪曲し、日本の美意識を戦意昂揚に役立つものに作り変えて鼓吹した反動で、広い範囲にわたつて伝統芸術拒否の動きが起つたのだつた。国粹主義者、軍国主義者が冒した罪悪のなかでも、この爪跡は長く後まで残つてしまった。その空白に雪崩れこんで来たのがハリウッド映画に代表される、芸術とはあまり関係



のないドタバタ娯楽であった。

今日、いろいろな産業国家のなかで、本来の映画が氣息奄々^{エンペツ}と辛うじて生きのびている国は日本である。ヨーロッパの国の人のなかには、文化芸術に関しては、日本はアメリカの植民地になってしまったと考えている人も多い。残念ながらこの印象はもつとも頻繁に往来している日本のビジネススマンの、文化芸術には全く関心を持っていないような言動によって加速されてしまった。そして日本に住んでいる人たちさえも、日本の伝統芸術、芸能のなかには今日的な意味で世界に発信できるものは少ないのではないかと思うようになりつつあった。それでいて文化交流の際に派遣されるのは能、歌舞伎、浮世絵であることが多いのは奇妙な現象であった。

ここには、伝統的な感性や美意識から切り離された芸術は真の創造性を持ち得ない、従って外国へ持って行けないという法則が働いているように私には見える。

しかし、そうした文化芸術を取り巻く長く続いた混乱のなかでも、孜孜^{シツシツ}として伝統を掘り下げ、そこに本質的な創造する力を見出し、それを今日に生かそうとする努力は続けられて来た。それに先立って、それまでわが国に表立っては存在しなかった西欧の芸術の技法、思想をわが国に移植しようとした開拓者の苦勞の積み重ねがあったことは言うまでもない。これは美術の分野ばかりではなく、音楽や文学においても同じである。

芸大の美術館、奏楽堂は、地味ではあってもそうしたわが国の近代芸術が辿った曲節に満ちた道程を私たちに示し、そのなかから真の創造へと人々を誘う場になるのではないだろうか。その際、伝統芸術、芸能の側にも、現代の若者たちの意欲を殺ぐような事大主義、權威主義、宗匠主義があったことを指摘する必要があるかもしれない。

それに加えて、気懸りなことのひとつは、芸術文化創造について何の見識も持たない一部の経済人や政治家が、ひ

とつ覚えの市場競争主義の導入を主張し、訳が分らないうちに「独立行政法人」なる「制度」を強引に決めてしまったことである。ここでも、一度「流れ」のようなものが作られるとメディアを先頭にしてその流れの方向へ雪崩れを打って動いていくという、わが国流の近代社会の悪い面が現れているように私は思うが、他の機関や設備では果すことのない役割を持っている芸大の大学美術館や奏楽堂のような場合は、市場競争原理主義者の威嚇や非難に脅かされることなく、本来の仕事を積重ねて貰いたいと思っている。今日はわが国の長い文化芸術の歴史の中で、世界に通用する日本的で創造的なものが生まれるかどうかの一番大切な時期かもしれないのである。

辻井喬

つじい・たかし

1927年東京都生まれ。詩人・小説家。本名 堤清二（(財)セゾン文化財団理事長）。東京大学経済学部卒業。1955年、第1詩集『不確かな朝』刊行。詩集に『異邦人』（室生犀星賞受賞）、『ようなき人の』（地球賞受賞）、詩集三部作（『群青、わが黙示』『南冥・旅の終り』『わたつみ・しあわせな日日』（藤村記念歴程賞）小説に『いつもと同じ春』（平林たい子賞）、『虹の岬』（谷崎潤一郎賞）、『沈める城』（親鸞賞）ほかがある。近著は小説『風の生涯』（芸術選奨文部科学大臣賞）、評論『伝統の創造力』等。現在『辻井喬コレクション』（全八巻）を刊行中。日本ペンクラブ副会長、日本文藝家協会常務理事、日本現代詩人会常任理事、東京芸術大学大学美術館評議員会委員。



刺戟ある場としての大学美術館

陰里鐵郎



陰里鐵郎

かげさと・てつろう

1931年長崎県生まれ。女子美術大学教授。専攻は近代美術史。三重県立美術館、横浜美術館などの館長を歴任。おもな著書に『夏目漱石・美術批評』『近代日本洋画素描大系・明治』『日本の印象派』『萬鉄五郎』がある。美術評論家連盟所属。

東京芸術大学の大学美術館は、一九九九年（平成十一）の開館以来、いくつかの、また話題に富んだ展覧会を開催してきて一般的にも高い評価を受けてきたといえよう。考えてみれば、この美術館ほど恵まれた条件や要素をもって出発した美術館は他にないのではなからうか。その恵まれた条件を一、二あげてみるとつぎのようなことがいえる。

（一）豊かな収蔵品をもっていること。旧東京美術学校か

ら一世紀余の歴史を有し、その量は約五万点ともいわれるが、質的にも秀れた作品が多いこと。（二）芸術・美術系大学に所属しているために、美術学部関係の全員が美術関係者で、美術のさまざまな分野の専門家を多数擁していること。（三）歴史、科学の博物館をはじめ、国や東京都の文化施設が点在する文化的ゾーンの公園内に在ること。二、三年余、地方の公立美術館の運営に関わってきたわたくしから見ると、まことに羨ましいかぎりの好条件であ

る。

しかし、それだけに難しい問題をかかえているであろうことも十分に推察される。たとえば、大学関係者のほとんど全員が、美術の作家であり、また美術の研究者、批評家であるから、それぞれが豊富な専門知識に基づいた意見をもっているにちがいない。それらを美術館の運営や活動に向けてまとめるのは至難のわざにわたくしには思えるからである。だが、これも美術館の側が明確な目的意識をもつて方向性を見定めていけば、自ずと有効で活発な美術館活動が生まれてくる可能性は高いであろう。

大学は、教育と研究の機関であるから、大学の一部である美術館も教育の場として機能することが求められる。美術系大学美術館として最大の責務は、コレクションと展覧会、その両面を通じて学生たちに多様な刺激を与え、学習や創造の意欲をかきたてることであろう。そのためにはたとえば、学芸員と教官とのあいだで意見交換がなされて共通の問題意識のもとに、大小どのような規模であれ展覧会が組織される、あるいは一点の作品が呈示される。そこに教官、学芸員、学生がつどい活発にディスカッションが行なわれる。集まる教官、学生は、展示されている作品の専門分野の連中とはかぎらない。いわばギャラリー・トークの一形態であるかもしれないが、それが単純な学習といった域を超えた質的に高い討論があり、さらにはジャンルの交流、世代間交流が実現されるにちがいない。こうしたことが日常的に行なわれる場としての美術館であってほしいな、と思ったりする。いや、もう当然行なわれているとは思いますが、拡大され、あるいは深化された形が考えられるように思えるのである。おそらく芸術大学の特色を生かした創作活動と学術研究とがからみ絡み合った、この大学美術館でなければできない活動があるにちがいない。

これまで開催された展覧会では、たとえば「油画を読む」展や「油画の卒業制作と自画像」展などがこの種のもので

あった。この点ではこれらは高く評価されるが、それが現在の学生にどのように受けとられ、刺激を与えたかには、内容が充実してただけに疑問が残らないわけではない。これはたぶん、各学科、各コースのカリキュラムに関係することかと想像される。こうしたことの打破を期待したい、また、現代美術、先端芸術表現関係の企画も期待したい。

交流といえは国際的な交流も大学として、また美術館として当然とり組まなければならない事業であろう。これにはすでにソウル大学と活発な交流がなされ、学生間の交流展も開催されたとのことである。学生間交流には単に作品展だけではなく、人的な、あるいは文化として総合的な交換交流が実現しているようである。これは素晴らしいことだと思う。異文化を識り、体験することは、これからの日本文化を創造していくうえでも重要なことであろう。大学美術館ということになれば、量的には圧倒的にアメリカが多いようである。東洋文化圏はもちろんのこと、他の文化圏との交流も望まれる。

さる日、「竹内久一と石川光明 明治の彫刻」展を訪れた。開催にあたっての文のなかに「芸大美術館の企画としても当を得たものである」と記されていた。わたくしもそう思う。まさに、こうしたものが芸大美術館でなされねばならない企画である。前期の油画関係の企画展もそうであったように。美術館は、単なるイベント会場ではない。とりわけ大学美術館の場合はそうである。歴大な作品と資料を有する芸大美術館である。文化的、美術史的価値を有しながら沈黙し、眠っているものも少なくないであろう。それらを発掘し、学芸員を中心として学内外の研究者と連携しながらそれらをほんとうに生かすことが求められる。

もう一つ付けたせば、会場の制約はあるが小規模でもいい、選出された作品による常設コーナーが欲しいと思う。

提言 に答えて

竹内順一

東京芸術大学の大学美術館について考えるとき、母体である東京芸術大学を措いて語ることはできないでしょう。芸大はまず何よりも、芸術教育、芸術表現の実践の場としてあります。芸術における教育、表現を考える場合、過去を振り返り伝統を再検討することがたいへん重要になってきます。明治時代に美術学校、音楽学校として設立された芸大の長く豊かな歴史は、そのような作業にはもつとも恵まれた施設と言えるでしょう。

大学美術館は、芸大に属し、芸大の教官・学生だけではなく、広く一般の方に向けて開放された美術館です。この一月に三周年を迎えたばかりのまだ新しい美術館ですが、背負っている歴史や他の美術館にはない特殊性という面からも、担うべき課題や果たしうる可能性は、非常に大きいものがあります。

これまでの歩みの中で、大学美術館の歴史とオリジナリティにもとづく展覧会をいくつも開催してきました。たとえば昨年の「デザインの風DESIGN SPIRIT OF JAPAN 生活の用・生活の美」展(二〇一一年一月〜一月)は、たんに日本の意匠やデザインの歴史をたどるというだけではなく、デザインをとおして日本美術の意味、ひいては生活文化を省みようというユ

ニークな展覧会でした。

今回「藝大通信」第四号の特集にあたって、お二人の先生からは非常に刺激的なご提言をいただきました。

辻井喬さんからのご提言は、大学美術館には日本の「近代化」の功罪を見つめ直すという大きな使命がある、と受け止めました。日本の近代美術史の「映し鏡」ともいっべき東京芸術大学、そこに付随する大学美術館が、机上の論議ではなく実践的に近代化の意味を追究しろという励ましでもあると思います。音楽学部の奏楽堂とともに、この二つの施設は、日本人の芸術的歩みを考える上で、格好の場所であることを私たちは自覚しなければなりません。

また、辻井さんが触れられている、国立大学の独立行政法人化の問題も、日本の近代化の隠れた部分を指摘されているのだらうと思います。国立というパブリックな組織として、これからなしうること、変わらなければいけないことが何なのかが、いまこそ問われているのでしょうか。

陰里鐵郎さんからの、教官と学生とのディスカッションについては、痛いところをつかれたという思いです。ところどころは、大学美術館は、「発信」するばかりで、フィードバックについてはじゅうぶんではないからです。「双方向の場」をつくることに努めたいと



「デザインの風DESIGN SPIRIT OF JAPAN - 生活の用・生活の美」2011年10月6日～11月25日

思います。

大学美術館はかつて資料館という名称でコレクションの保存が中心で、専任の研究者がいない組織でした。正式の美術館として発足するにあたっては、研究施設としてもよりよく機能するように、組織の充実がはかられました。年間の入館者数が約二万人というキヤパシティ、施設のもっているハードの面から、各地方にある県立美術館と同じくらいの規模だと思えます。これは、多くの観覧者の収益を必要とする大規模な国立博物館と、収蔵品を中心に展示する個人美術館の中間に位置づけられ、実験的な展示を可能にする利点をもっています。

二年一月から二月に開催した「間 二年後の帰還展」は、海外や国内の専門家筋からたいへん高い評価を受けました。この展覧会は、一九七八年にパリ装飾美術館を皮切りに、その後欧米を巡回

し好評を博した「MA: Space-Time in Japan」(「間 日本の時空間」)展を、二〇年ぶりに当時の企画者でもあった磯崎新氏によって再構成したものです。このように集客面もさることながら、創造の現場にある美術館として、内容に対する自己評価はもろろんのこと、他の美術館や関係各筋からの評価を踏まえて、これからも「見えない美術館力」を身につけていきたいと思えます。

三周年を迎えた大学美術館ですが、一年目は存在感を示す展覧会をということ、「芸大美術館所蔵名品展 近代日本美術の原点」で開館を飾りました。二年目は「日本画の一〇〇年展」をはじめ普及型の企画展を、三年目は問題追究型をテーマに模索を重ねながら歩み続けています。

これからも大学美術館に忌憚のないご意見をお寄せいただきたいと思います。



竹内 順一

たけうち・じゅんいち

1941年神奈川県生まれ。66年東京芸術大学美術学部芸術学科卒業(工芸史専攻)。1966年五島美術館学芸員に就任。90年学芸部長。98年より東京芸術大学美術館学芸企画研究室教授。2002年より大学美術館館長。



「間 二年後の帰還展」2000年
10月3日～11月26日